

# 子どもと環境\*<sup>1</sup>

佐藤快信\*<sup>2</sup>

## Children and Environment\*<sup>1</sup>

Yoshinobu SATOH\*<sup>2</sup>

### 1. 地球環境問題

#### 1.1 環境

現在の我々の生活の中に「環境」という言葉が入り込み、身近な言葉として存在している。ただ、「環境」という言葉は、例えば、社会環境であったり、家庭環境、自然環境などであったり、その意味する範囲はとても広いといえるだろう。ここで、対象とする「環境」は、自然環境を軸とし、その他多くの環境を含めた「地球環境」という面で捉えていくことにする。

コンクリートジャングルと称される大都会においては、地表はコンクリートやアスファルトに覆われ、我々が自然との接点を持って生存していることを認識することが少ない。我々が食する食べ物においても自然との関わりを持っていることに気が付かず、極端な言い方をすれば人間は人間とだけで生きているという錯覚を持つだろう。しかし、森や山にいき、地表との接点に注目すれば、我々が大地を踏みしめているその足の下(約200cm<sup>2</sup>)には、約1000匹のダニがおり、土1gの中に昆虫、原生動物、細菌、微生物などが1000万から数億いるという認識を我々は持ち得ない。さらに、人体の大腸の中に100種類、100兆もの微生物が存在していることも普段認識することはない。

このように、我々人類は自然とは無関係に生存しているのではなく、密に関係していることを認識しないといけないし、現在さまざまな形で取り上げられている「環境問題」の原因に人間が関わっていることを知らなくてはならない。

#### 1.2 地球環境の基本的問題

いま、地球規模の「環境問題」として、オゾン

層の破壊、地球の温暖化、酸性雨など(図1)が起きている。それぞれの原因は、図に示されている通りだが、それぞれの原因や問題が複雑に関わっていることがわかる。しかし、それらの根本的な原因は何かとみれば、人類の経済活動であったり、人類の増殖であったり、人類の価値観であったりと、全ての原因は人類に関わってくるのである。いま問題となっている「環境問題」は自然の中に人間が介入したことによって引き起こされたといってもよいだろう。

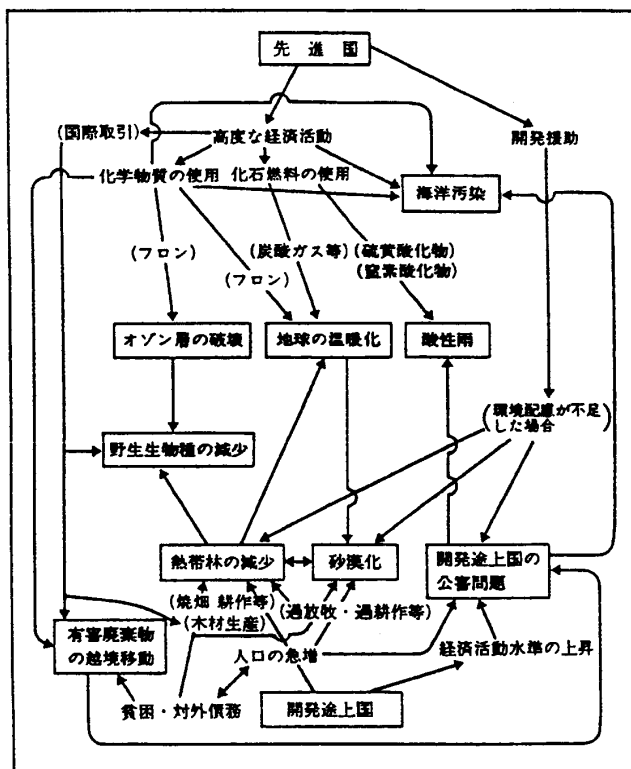


図1 地球環境問題

(出典: 環境庁編「環境白書」平成2年版)

\*<sup>1</sup> Received February 20, 1993 \*<sup>2</sup> 長崎ウエスレヤン短期大学助教授 Department of Culture, Nagasaki Wesleyan Junior College, Isahaya, Nagasaki, Japan 854.

### 1. 3 自然と人間

地球上に生存している生物の中で唯一大増殖している生物は人類といえる。紀元1世紀に2.5億人だった人類は、1850年に10億、1900年に16億、1950年に22億、1977年には2倍の50億人と人口を増やし、最近では1年に9000万人増のペースで増殖しているといわれる。年間を平均して世界人口は1秒間に3人増えている計算になる。例えばよく例として出されるヤマネコとウサギと生態数の関係にみられるようにヤマネコの餌であるウサギが減少すればヤマネコの生態数も減少するという各種の生態数の調整がバランスをとりながらおこなわれていくシステムの中に人間が存在しているとすれば、このような大増加は考えられないことだろう。また、人間が他の動物と変わりがないならば、多少の増加は問題がないかもしれない。しかし、他の生物と人類が異なる点は他の生物が長い期間（1万年）かけて環境に順応していくのに対し、人類は自らの手により環境を変えていくことができることである。そのプロセスは自然の破壊と他の生物の多量殺りくを生じさせる場合がある。自然からみた場合、人類は迷惑な、凶暴窮まる生物と写ることだろう。また、独自の生活環境をつくりだし、適応してくことを「開発」という言葉で我々は表現している。この「開発」という名のもとで2000年までに50万から100万種の生物が絶滅の危機にさらされるという。「開発」が大気、水、土壌、海洋の汚染をもたらし、さらに、オゾン層の破壊、温暖化と異常気象、酸性雨、森林破壊を引き起こし、他の生物だけでなく、人類自身にも不利益を与えることになった。このような、大きな地球の変化は過去に存在しなかったろうし、人類の大増殖と自然または他の生物との不公平を生んだことはないだろう。

### 1. 4 人類と人類

図1を見ると、地球環境問題の諸原因は先進国と開発途上国の二極化で示されている。これは、南北問題として認識されている、北半球のひとにぎりの豊かな国と南半球の多くの貧しい国々との間に生じた生活格差の問題でもある。例えば、

1991年の日本の小学生のお年玉が一人当たり平均24,000円だったのに対し、1989年のエチオピアの1年間の一人当たりの国民所得が20,000円不足だったことは、豊かな国とそうでない国との生活格差のよい例であろう。また、資源消費量についてみれば、先進国一人当たり年間5トンの石油を消費している。アメリカはインドの約25倍、ケニアの約50倍の消費量となっている。先進国では、先進国の国民一人に対し、開発途上国の数十倍の資源を費やしていることになる。

このような生活格差は、もっと深刻な形で現れてくる。幼児の死亡率（表1）を見ると世界129カ国の内1000人につき300人近い幼児が死亡しているのは開発途上国であるし、10人以下の国はひとにぎりの“豊かな国”の先進国である。この数字の背景には、国民所得、家族所得、栄養と衛生状態、母子保健サービス、教育の普及度など子供を取り巻く広範囲な生活環境条件が含まれているいえるだろう。世界では人類の5分の1の10億以上の人々が「絶対的貧困」の中にあるといわれる。その人々が発展途上国に生活しており、先進国との生活格差は年々拡大する一方である。発展途上国における子供を取り巻く環境は、最近のAIDSの問題で改めてクローズアップされた少女売春や、先の湾岸戦争にみるように地域戦争が起きているなど決して生やさしい環境ではない。地域紛争などにより15歳未満の兵士が推定で20万人いるといわれる。国連の「子供の権利に関する条約」第38条には、15歳未満の子供の戦争からの保護をうたっている。

ところで、このような生活格差の背景は開発途上国ではどう見ているのかといえば、先進国が安い原料を買い、製品を高く売ったり、安い労働力を利用している、現在の市場、財政システムに南北の公正を欠く部分が存在するからだとしている。国連貿易開発会議（UNCTAD）によれば、世界の国内総生産の中で途上国が占めている生産比率は1980年には21.8%、1987年には17.8%と低下しており、格差は広がる傾向にある。

表1 5歳未満の子どもの死亡率

	5歳未満児 死亡率 (対1000人)	乳児死亡率 (1歳未満) (対1000人)	総人口 (100万人)	年間出世数 (1000人)	5歳未満児の 年間死亡率 (1000人)	1人当たり のGNP (米ドル)	
							1990
(死亡率の高い国)	モザンビーク	297	173	15.7	699	208	80
	アフガニスタン	292	167	16.6	888	260	280
	アンゴラ	292	173	10.0	472	138	610
	マリ	284	164	9.2	472	134	270
	シエラレオネ	257	149	4.2	201	52	220
	マラウイ	253	144	8.8	494	125	180
	ギニアビサウ	246	146	1.0	41	10	180
	ギニア	237	140	5.8	294	70	430
	ブルキナファソ	228	133	9.1	426	97	320
	ニジェール	221	130	7.7	401	89	290
(死亡率の低い国)	シンガポール	9	8	2.7	47	0	10450
	ウラン	9	8	56.1	761	7	17820
	スイス	9	7	6.6	78	1	29880
	デンマーク	9	8	5.1	57	1	20450
	アイルランド	9	8	3.7	67	1	8710
	ドイツ	9	7	77.6	863	8	20440
	カナダ	9	7	26.5	356	3	12030
	オランダ	9	7	15.0	192	2	15920
	香港	7	7	5.9	72	1	10350
	フィンランド	7	6	5.0	60	1	22120
スウェーデン	7	6	8.4	109	1	21570	
日本	6	5	123.5	1390	9	23810	

(出典:「世界子供白書 1992」)

## 1.5 大人と子ども

南北問題の生活格差について先に触れたが、環境問題に関連してもうひとつの格差というものが存在している。この問題は国連環境計画(UNEP)と国連児童基金(UNICEF)の合同調査の報告書の中であげられ、「世代間の不公平」という言葉で表現された。この言葉は、日本においては1990年の環境白書に登場した。

1950年(昭和25)以降、人類は還元不可能な化石燃料(石炭、石油)、鉱物資源を消費し、環境破壊を引き起こしてきたといえる。今、われわれは「子どもの権利条約」において子どもに対し、「あなたの人権を大人と同様に保障します。」といっているが、汚れた地球をそのまま受け取ってくださいといえるのか。これから生まれてくる子どもたちに、「汚染」というラベルをつけた地球を与え、その地球をあなたがたが何とかしなさい

というのは、実に我々大人が無責任で、不公平なことをしているのではないかという感がある。

「世代間の公平」を求めることは現存する世代相互の関係、例えば、人種、性、言語、宗教などの差別禁止の原理をもって平等とすることを越えて、目の前に存在しない未来の世代との公平、平等を求めることであり、今までの倫理、価値観などとは異なった新しい倫理、法秩序、経済原理が必要とされるだろう。未来の世代の価値観を現代の我々が代表することができないという反論はあるが、現代の我々がそれらを考えなければ未来の世代に対し生活の可能性の幅を狭めるという選択の幅を補償できなくなる。そのような流れの中で、経済学の分野では市場経済の理論が適応しないこと、人類の生存に不可欠な自然環境および資源を今までの市場的基準ではなく社会的基準によって共同管理されることの必要性を考慮する環境経済

学の分野、倫理学では環境倫理学の新しい分野が生まれてきている。

## 2. 「豊かな社会」と子ども

### 2. 1 「経済大国」日本

日本は、第二次世界大戦後の荒廃から著しい発展をとげ、1988年の国民一人当たりの国民総生産は米国を抜き、世界第1位となり、世界有数の「経済大国」となった。確かに、経済成長の過程において、所得水準の上昇、二重構造の解消、国民の中流意識、耐久消費財の高度普及、医療技術の発展による寿命の延長などにみられるように国民生活の面においても向上と改善がなされてきた。しかし、生活基盤（住宅、生活道路、下水道、公園など）である社会資本の整備が遅れ、楽しみや生きがいなど文化・余暇活動は軽視され、「ゆとり」のない生活を強いられてきている。国民総生産などの経済指標の数値にあらわれる「豊かさ」と我々国民が感じている生活の質との間のギャップは拡大する一方である。高度成長期に問題となった公害などの問題は改善がなされてきてはいるが、それら問題は依然として残っている。円高と国際化が進む中で西欧に比べ生活の質の遅れを感じる状況は「豊かな日本」に住むものとして皮肉な現象といえよう。

ところで、経済の発展の目的は人類を飢えや病气から解放し、「ゆとり」ある福祉社会を実現するはずだった。しかし、日本では経済的に豊かになるほど理想から遠ざかり、先進国で最も長い労働時間、効率を競う社会制度を形成してきた。このことは生活をはじめ、教育、福祉を経済価値の「効率」を求める効率社会の中に巻き込み、経済価値を増やすかどうかはその人間の能力の判定基準とし判断されることを促すことになる。価値観の問題は、社会経済的人間関係の基にある人間の内面（精神）への影響が内面汚染として現れる。先に述べたように、現在の日本では人間の価値をお金に換算してみる傾向にあるといえよう。確かに、物の価値をお金に換算することは物と物との間に媒介するシンボルとして有効かもしれない。しかし、人間と人間との間に媒介する言語のよう

に、時には差別を生じさせるように人間に逆襲することもある。例えば、「カブト虫を知っているか？」という問いに対し、「デパートで500円で売っているよ」という会話が子ども同士の中であったことを聞いたことがあるが、物の本質を知らないで、そのものの価値を知ったかのような錯覚に落ちいてはいまいか。カブト虫もひとつの生命体であることの認識はどこかへいき、単なる商品または消耗品としてしかみていないのではないか。このようなことは日本の経済がバブルで賑わっていた時期に顕著にあらわれた。そのときの地価や株がそうであったように本質的な価値と価格が遊離し、お金が一人歩きしてしまっていた。

### 2. 2 内面的汚染

以前、新聞の読者の欄で、孫が祖母ちゃんの肩を揉みながら「祖母ちゃん、もうすぐ子供の日ね。」といわれ、孫の思いやりだと思っていたのに、実はお小遣い欲しさの打算があったのかとがっかりした、というのをみたことがあった。現代では、なかなか無償の愛というのは見つからないらしい。某テレビ局は、「愛は地球を救う」と題して24時間テレビをしているご時勢である。お金というものが我々の生活原理の中に浸透し、「豊かな国」の生活空間に存在する愛というのも愛欲と同一視した愛、愛されることを望む愛、エゴイスティックな愛として存在し、どうも人間的な洗練された愛というものから遠ざかってきているように思える。なぜ、いまさら愛のことをいわねばならないのか。それは、今あるいろいろな困難を解決して人間的な特徴を実現させるエネルギーは愛でしかないかと思えるからである。愛情よりもお金という考え方にとらわそうになる現代の風潮が子供たちまで広がっている現状は、非常に深刻な「豊かさ」の持つ内面汚染のひとつの姿であろう。

また、内面汚染の姿には「孤立化現象」としても存在してはいまいか。人間の行動様式のひとつに社会性があり、人間ほど多くの人々、多くの生物に頼らないと生きていけない。そのため、自分の気持ちを伝えられる相手がない「孤立化現象」が、最近問題となっている”いじめ”や”子供の

虐待”という形になって表れているのではないだろうか。

### 2. 3 ゆがむ目的意識

先の経済原理の中では、どうしても目先のことに振り回されて、儲るかどうか、競争相手に勝てるかどうか、仕事の効率は向上するかが目的意識の中心となってしまう。我々の目的意識は、目に見える現実的なニーズに基づいていることが多い。しかし、我々が「豊か」ではないと感じているのはそうした現実的でない、いわば無意識の中で形成されるイマジネーションによる目的意識とのギャップからきているのではないだろうか。そのため、我々はマニュアル的な生き方から創造的な生き方に重きをおいた生き方を指向すべきで、ゆがんだ目的意識の中で、創造性を欠いた中で子供を育てるのは子供を保護区の中に押し込めることになる。「子供の権利条約」ではありのままの子供として解放することをうたっている。たしかに、南北問題の”北”ではぬるま湯の中で人権を獲得しそびれ、”南”では人権または生存権さえ奪われている現状があるにせよ、大人よりもはるかに豊かな人間性を秘めていることにもう一度注目すべきである。

## 3. 生命の源—DNA—

### 3. 1 生命の源—DNA—

現在のような状況下で、我々は子どもの何を最大限に理解し、優先したあげなければいけないのか。ひとつの例として「子供権利条約」についてみると、第3条において「その子その子の最善の利益を第一義的に考慮しなければならない」と書かれており、このことがこの条約の精神的核心理ともいえる。では、現在の地球環境下における「最善の利益」とは何であろうか。第6条には「固有の生きる権利を有すことを認める」、「子どもの生存及び成育を最大限可能な限り確保しなければならない」とあり、我々は一人一人の、その子の固有の生命を大切にすること、その固有の生命の成長を大切にかつ助けることに責任を持たねばならないということである。

では、生命と何かというと、生物学的には遺伝子が生命の基本といえよう。我々人間は遺伝子によって他の生物種と区別され、人間として認識される。この遺伝子は、デオキシリボ核酸（以下、DNA）という物質で構成されている。DNAは、幅100万分の2ミリ、長さ約1メートル、30億対の塩基が配列された2重らせんのテープの形状をしている。

我々は約0.1ミリの受精卵からはじまり、生まれるまでに約3兆の細胞に分化し成熟までに約60兆の細胞に分化していく。それらひとつひとつの細胞の核の染色体にある30億対の塩基の組合せ、配列はひとりひとり異なっており、生まれ出るものには選択の自由はなく、与えられたものとして生まれ出る。この30億対の塩基の組合せ、配列の中で遺伝子としての役割をしているものとそうでないものがあり、人間の場合その一生で使用されるのは約10%またはそれ以下で、残りは使われならしい。また、DNAの配列が固定的でないことはノーベル賞を授賞した利根川進博士の研究で明らかにされており、少なくとも免疫抗体を作るDNAにおいてはDNAの再配列、つなぎ換えがおこなわれている。それは、脳細胞においてもDNAの再配列が起きている可能性を示唆するものである。

ところで、我々の持つ遺伝子中には欠陥があるために3000種以上の病気の情報が存在し、通常8から10の欠陥遺伝子が存在し、外的要因がないから発病しないとうことがある。30億対の中から不幸にして内・外的要因によって障害を持って生まれてくるのが当然のように存在する。この観点に立てば「障害」も人間固体の違いのひとつに過ぎないということになる。たしかに、自分の持っている遺伝子は確かに自分という生物固体の核であるが、我々一人一人が違うように多様な結果のひとつでしかないといえる。

分子遺伝学においては、遺伝子は自分のコピーを残すこと、つまり自己複製という生物学的な機能を持つとされている。この観点で動物行動学をみれば固体は遺伝子の運び屋に過ぎないといえる。しかし、単に我々は遺伝子の運び屋ではなく、人

類という種の生命の一部を担っており、35億年の全生命の進化の歴史（少なくとも数約万年の人類の歴史）を背負ったものであり、地球生命という共存共有の生命連鎖の一部であると考ええる。

### 3. 2 遺伝子と環境

生物が自分から選べないもののひとつに遺伝子があり、もうひとつには生まれ出でる環境がある。どういう地域、家庭に生まれるか。例えば、遺伝子の中に言語を習得する情報がDNAの中にあるとしても、どの言語を習得するかは生まれでた環境による。ということは、地球上の生物の生命力は与えられた遺伝子と与えられた環境によって得られている。しかし、人類が他の生物と異なるのが、与えられた環境の枠組みから向け出すことが出来ることである。例えば、南極に生息するペンギンを動物園または水族館で飼育する場合、生息していた環境に近い状態で飼育しなければその飼育は難しい。それに対し、人間は地球上のあらゆる地域へ行くこともでき、そこで生活することもできる。しかも人間はあらゆる環境に対応できる生体的機能を一切持っていないのである。それは技術または文明を持つことにより、環境を変化させることに対応することができ、その意味で人間は幅広い適応能力を持つといえる。

したがって、人間が他の生物と異なり人間には与えられた遺伝子と環境と生まれでた後に得る生命力を持つことがあげられよう。これを維持しているのが、数百年前に発達した大脳の働きと身体構造といえるかも知れない。その生まれ出た後に得た生命力が、形となったのが産業・技術などの「文化・文明」であり、よりよい生活を求める「開発」であった。そして、現在環境問題という形に変わって我々の前にあらわれたといえる。

### 4. 地球の将来に向けて

一見、子供と環境は結びかないようであるが、実は環境問題を考える場合、将来この地球で生きていく子どもたちのことを考えなければいけないことを痛感する。現在、問題となっている地球規模の環境問題が人間の諸活動と関連して発生して

きたことを考えれば、これから我々人類が何を指して生きていくのかが問われているように思える。人類の滅亡への道を選択するのか、他の生物をも道づれに地球全体の滅亡への道か、共存共有の道か、選択枝は数多く存在するが、それらのなかから何を選択するのか、その大きな判断の基準となるのは将来この地球で生存していく子供たちに大きく関わってくる。子供たちにどのような地球を残し、どのようにこれから人類が生きていくのか、その指針を我々は示さねばならいだろう。

### 謝 辞

「子供と環境」というテーマで、子供との関連から環境について考える機会を与えてくださった大村市教育委員会、長崎ウエスレヤン短期大学社会福祉研究所、同大学教授 増田樹郎氏に感謝の意を表します。また、私に新たな啓発をくださった公開講座に参加された方々にも感謝の意を表します。

### 参考文献

1. ニュートン、「地球クライシス」  
(Newton別冊)、教育社、1989。
2. 藤原保信、「自然観の構造と環境倫理学」、  
御茶の水書房、1991。
3. 暉峻淑子、「豊かさとは何か」、  
岩波書店、1989。
4. 宮崎 勇、「日本経済図説」、岩波書店、1989。
5. 宮本憲一、「環境と開発」、岩波書店、1992。